

消 息

其の後のヴィーン經濟學界

一九三八年三月獨逸合併後、ヴィーンの經濟學界はどんな變化をうけたか。いま私は雜誌其他の若干の材料を通じてその事情の一端を窺つて見たいと思ふ。

従來理論經濟學の方面で重きをなしてゐたヴィーンの經濟學雜誌 *Zeitschrift für Nationalökonomie* は第九卷の第一冊を出して獨逸合併に遭遇した。其の後は Hans Mayer 老教授が以前の Morgenstern 教授に代つて編輯者となり、Alexander Mahr 助教授が主筆となつた。この二人の他に、共同編輯者としてフラインブルグの Bucken、ローアの Masci 及びヘルリンの Stachelberg の三教授——獨逸經濟學の理論派——の名が連ねられてゐるのが目につく。これによつて此の雜誌自體も獨逸合併の體裁を整へたのであるが、しかし依然として純理的方面に主力を注ぐ此の雜誌の傳統は編輯者の名前のうちに現はれてゐる

ると言へよう。第九卷第二冊は Mayer 教授の歴史的卷頭言を添へ、定期を稍々遅れて刊行され、結局一年五冊のところを二年に跨つて出し、第十卷第一冊は少し間を置いて今年の春に出た。とにかく此の雜誌が獨逸經濟學の理論派を背景として續行されてゐることは喜ばしいことである。

ヴィーン大學の陣容が獨逸合併によつて大きな動搖を受けたことは想像に難くない。そのために職を辭し國を去つた學者はかなり多數にのぼつたやうである。一九四〇年後期の「講義目錄」(日獨文化協會にあり)を見ると「經濟學」は、Mayer 及び Vogel の二教授が主力となつてをり、罷めた人々には Siann, Degenfeld-Schonburg, Schiff, Morgenstern 等々がゐる。講義の内容を見ると、Mayer 教授が財政學の外に「獨逸國民社會主義の經濟指導」、Vogel 教授が「國民社會主義的經濟建設の基礎」をやつてゐるのが目につく。その他では Striel が經濟學演習、Günther が社會政策、Mahr が工業政策、Klage (Winkler 教授の後繼)が統計、Gross が商業政策、Jagler が農業、Ortel が經營、更に Baxa が社會學、Wenger が歴史と

なつてゐる。ウィーンでは大學以外に Hochschule für Welt-Handel も依然続けられてゐるやうであるが、これについてどんな陣容の變化があつたかは、いま手元に材料がない。

獨逸合併當時も大學閉鎖といふことはなかつたとのことである。ただ聽講生の数は大部減つてゐるやうであるが、それは多く其の後の戦争の結果であらう。私がゐた當時はウィーン大學全體で大體一萬人前後といふところであつたが、最近では七千人、更に四千人であることが、前記「講義目錄」中の統計に見られる。

Stann 教授は合併直後、政治上の關係で一時禁錮されたさうであるが、其の後どうなつたか。誰か歸朝された人に聞きたいと思つたが、遂に其の機を得なかつた。Morgenstern 教授は既に合併前にアメリカに行つて、いまニュー・ジャージー州のプリントン大學にゐる。近着の雑誌 The Journal of Political Economy, June 1914 に「久しぶりに同教授の論文『Professor Hicks n Value and Capital』」に接した。これはロックスの動態理論の基礎たる Week, plan, expectation の三つの概念がなほ動態理論の眞の難關に迫つたものではないことを、相變らずの批判的な鋭さを以て指摘した論文である。

更に、我が國でも紹介されてゐるウィーンの學者でいまアメ

リカにゐるのは、有名なカール・メンガーの息子で數學者・經濟學者たる K. Meuser 教授（インディアナ州、ノートルダム）を始め、Tinber (アイオワ州立大學)、Wald (ニューヨーク州、コロンビア大學)、Lindberg (プリントン大學) 等である。これらの人達は Morgenstern 教授を中心に、嘗つてのオーストリア派經濟學を純經驗主義の方面に押し進めようとした人々であり、既に早くからウィーンを去つた Hayek, Rosenstein-Rodan, Machlup, Haberler と共に、今日の所謂ウィーン學派の若い原動力の一團なのである。最早や彼等はウィーンにゐないウィーン學派となつたわけである。學問上の純經驗主義は果して政治上の國民主義と相容れぬものであらうか。それとも問題は學問的業績とは關係なしに政治的・民族的な壓迫によると言ふべきであらうか。それはとに角として Tinber と Wald とは雑誌 Econometrica を舞臺として旺んに活躍してゐるやうである。又 Tinber は The Variante Difference Method, Bloomington 1940 の著書がある。社會科學方法論に關して著述の Ferix Kaufmann もニューヨークに於て、雑誌 Social Research によく論文を發表してゐる。

Morgenstern 教授がライターをやつてゐた「ウィーン景氣研究所」にも大きな變化があつたやうである。その「月報」

Monatsberichte der österreichischen Konjunkturforschung (三菱經濟研究所にあり)は、一九三八年四月號から「伯林景氣研究所」の Wagenmann 教授の主筆の下に統轄され、その後内容の上ではハンガリ、ユーゴ、ルーマニア、ブルガリア、ギリシヤ、トルコ等東南歐羅巴六國を含めて經濟統計を收載してゐる。近著のものは今年の五月號であるが、その名稱はいま Monatsberichte des Wiener Instituts für Wirtschaftsforschung と改められてゐる。

ウィーンを去つたウィーン學派の人々に、私は限りなき愛惜

を感じる。しかし政治の大きな嵐に吹きまくられた今後のウィーンの學界が、悪い意味で政治化された學問を醸成していくと速断してはならない。學問そのものはあくまで忠實に事實の認識を生命とすることは變りはない。ただ事實認識の選擇と仕方とはその限界に於て常に實踐的要求によつて規定されるものであり、これを離れて單純に認識そのものはあり得ないのである。ウィーン學界の變化を顧みて私は改めて社會科學の限界に横はる此の問題を深く考へさせられるものである。

(山田雄三)